

## 統一テーマ「ロマンス諸語における語順」

藤田 健（とりまとめ）

### 1. はじめに

日本ロマンス語学会第52回大会の統一テーマは、「ロマンス諸語における語順」であった。この枠内で木越勉、川崎義史、今田良信、津田悠一朗、山本真司、鈴木信五（敬称略、以下同様）による6発表（持ち時間20分）が行われた。木越はスペイン語における形容詞の語順、川崎は中世スペイン語における否定語と斜格代名詞の語順、今田は古フランス語における付加形容詞と名詞の語順、津田は現代共通イタリア語における並列複合語内の語順、山本はフリウリ語の複合過去形における人称代名詞与格の語順、鈴木はルーマニア語におけるSVOとVSOの語順に関する問題をそれぞれ論じた。このうち今田、山本、鈴木の記事は論文として本号に掲載されている。

### 2. 総合討議と質疑応答

以下に総合討議のもととなる研究発表の要旨と、それをめぐって行われた討議の概略を記す。

#### (1) 木越勉「スペイン語形容詞の前置・後置」

スペイン語において名詞を修飾する形容詞は名詞に前置されることも後置されることもあり、この決定要素の分析はかなり複雑である。発表では、従来の分析では説明されていない部分として、寸法を表す品質形容詞について非修飾名詞の性質によって語順が決定されると提案する。RAE他(2009)等は後置形容詞は名詞を「制限」としているが、寸法を表す形容詞 *alto-bajo*, *largo-corto*, *grande-pequeño*, *ancho-estrecho*, *fino*, *profundo* について、修飾される名詞が具体名詞であれば通常後置され、抽象名詞あるいは名詞の内包を修飾する具体名詞であれば「制限」であっても通常前置される。具体名詞を修飾するときは形容詞の核となる寸法の意義を持ち名詞に後置されるのに対し、抽象名詞を修飾するときは寸法の意義を失い、程度を示す機能を持ち、名詞に前置されると説明する。

総合討議では、*alto nivel* と *nivel alto* の違いについての質問や名詞・形容詞だけでなく文の中の他の要素との共起関係も面白いのではないかというコメントが出された。

#### (2) 川崎義史「中世スペイン語における否定語と斜格代名詞の語順の通時変異

: *que lo non pueda vender-que non lo pueda vender*」

中世スペイン語では、主節において否定語及び主格人称代名詞と斜格人称代名詞との語順が決まっているのに対し、従属節においてはその語順に変異が存在する。発表では、斜格代名詞と定動詞の間に否定語及び主格代名詞が挟まる *interpolación* という現象について、中世スペイン語公証文書コーパスを用いて *que* 節における通時的変異を調査している。この現象は否定語については 1500 年頃までは一般的であったが、それ以降はほぼ消失するのに対し、現代語で用いられる否定語—斜格代名詞—定動詞という語順は 13 世紀にも見られる。主格代名詞については、*interpolación* が 16 世紀前半まで見られるのに対し、現代語の主格代名詞—斜格代名詞—定動詞という語順は 16 世紀以前にも見られるが、一般的なものではない。*interpolación* の言語内的要因として *que* と斜格代名詞の強い結びつき（コロケーション）、言語外的要因としてガリシア＝ポルトガル語の影響があげられ、*interpolación* の消失の言語内的要因として主節からの類推、言語外的要因としてアラゴン方言との接触の可能性が考えられる。

総合討議では、*interpolación* の要因としてあげられたコロケーションの性質やクリティックとしての制約の時代的变化についての議論がなされた。

### （3）今田良信「古フランス語における付加形容詞と名詞の語順について

#### —文法書記述の問題点を検証して—

古フランス語における付加形容詞と名詞の相対的順序に関しては、形容詞—名詞という語順が原則的であるという記述が比較的多いが、実際のテキストでは付加形容詞が名詞の後に置かれる例が散見される。発表では、形容詞の前置例と後置例それぞれにおける延べ用例総数と形容詞別異なり語数の対比という観点からこの問題を検討する。用いられた資料体において、前置例の延べ用例数は 115 例、後置例のそれは 152 例である。百分率では前者が全体の 76%、後者が 24% となり、前置例が後置例の 3 倍強という結果となる。一方、形容詞別の異なり語数から見ると、前置例は 17 種、後置例は 17 種であり、そのうち両者の間でゆれているものが 5 種ある。形容詞の異なり語総数は 29 種となり、百分率で見ると、前置例・後置例いずれも 59%、ゆれて出現するものが 17% となる。この結果、付加形容詞は一般的に名詞の前に来るという従来の説明は、延べ用例総数による出現頻度の観点から見た場合にのみ成立し、形容詞別の異なり語数の点から見るとあてはまらないと言える。

総合討議では、ゆれが見られる形容詞に共通の特徴は見られるか、前置例を増やしている *granz*, *biaus* には定型表現が多いのではないかという質問が出された。また、用いられた資料体の写本としての性質やゆれの問題に関するラテン語からフランス語への通時的変化についてのコメントが出された。

#### (4) 津田悠一朗「現代共通イタリア語の並列複合語における構成素の語順」

現代共通イタリア語では並列複合語が数多く見られるが、その構成素の語順には一定の規則が存在する可能性がある。発表では、「名詞＋名詞」並列複合語の中で-tore という接辞で終わる職業語についてその規則を考察する。まず、音韻的観点から、二つの要素が与えられたとき、可能ならば短い方が長いほうに先行するという Behaghel の増加の規則が適用されるかを検討する。その結果、モーラではなく音節の長さを用いれば、のべ数 859 例中 262 例、異なり数 370 語中 149 語とかなりの数の複合語内部の語順が説明できる。しかし、この音韻規則によって説明できない例も、のべ数 859 例中 189 例、異なり数 370 語中 88 語と少なからず存在することから、二つ目の規則として構成素の間に修飾関係が成立する場合、主要部が先行するという head-initial の規則を設定する。この二つの規則の適用順に関しては、まず意味規則が適用され、それが関与しないときに音韻規則が適用される考えれば、全体として説明できる語の数が多くなると主張する。

総合討議では、発表で扱われていない *cantautore* や職業語以外の *chiaroscuro* のような語にも言及すべきという指摘や、無生名詞の場合どちらかが意味的に主要部になるものが多いのではないかというコメントが出された。また、*attore-cantante* 等について意味的に主要部となるのはどちらかという質問や、名詞が二つある場合 *andata e ritorno* のように物事の順序が関係するのではないかというコメントも出された。

#### (5) 山本真司「フリウリ語の複合過去形を構成する過去分詞に前接される人称代名詞与格」

フリウリ語の人称代名詞の対格・与格接語形は、定動詞の前に置かれるのが原則で、複合形の動詞についても多くの方言においてこれが当てはまる。しかし、与格形接語 3 人称の単数形(i, j, gi)及び複数形([i]ur, i, j)が複合形の過去分詞の語末に接続する例が観察される。これは与格形の場合と与格＋対格形の場合のいずれにも見られ、特にゴリツィア地区において顕著である。発表では、この現象が多くの場合人称代名詞の重複用法と関連すると指摘する。強形の人称代名詞とともに出現するタイプと、接語形与格代名詞が前接形と後接形として同時に現れるタイプがある。更に、接語形の重複が強形と共起する三重の与格という現象も観察される。また、複合形の過去分詞以外に、不定詞+i-gi の例や、前置詞に前接する与格接語形と動詞に付加される与格接語形が共起する例が報告された。

総合討議では、与格接語形が重複する例において、前に置かれる接語形のみ発音する方言と、後に置かれる接語形のみ発音する方言があるという可能性はないかという質問が出された。

#### (6) 鈴木信五「ルーマニア語における SVO と VSO の語順」

近代ロマンス諸語は一般に SVO を基本語順としており、現代ルーマニア語においても主語が表

現される場合、広く用いられるのは SVO である。しかし、統語的観点からは、従属節において、とりわけ接続法によるものでは VSO が基本にあることから、ルーマニア語では VSO が統語的に無標の語順であり、SVO は左方転位を適用させた結果であるという仮説が提示される。すなわち、基本にあるのはレーマのみからなる VSO の語順であり、文中のいずれかの項をテーマづけたい場合に左方転位という統語手段が用いられるのである。主語という要素はテーマにうってつけであることから、左方転位を経て得られた SVO の出現の度合いがきわめて多くの文脈で優勢になっている。この現象は、ルーマニア語の左方転位が有標性を大きく磨滅させている現象の一つととらえられると説明される。

総合討議では、SVO において S がテーマ以外の場合にどのように考えられるか、イタリア語も同じように分析できるかという疑問や、生成文法において SVO の S は左方転位の場合と AgrP 指定部にある場合の二つがあるという分析があり、ルーマニア語の場合も適用できるのではないかというコメントが出された。

### 3. まとめ

今回の統一テーマは、語順という統語論において最も基本的な現象が取り上げられ、様々な言語について多様な語順に関する現象が報告・分析された。出席者の関心も高く、総合討議においては極めて活発な議論が展開された。特に今回は、一つの要素が複数の語順において生起するという現象が数多く報告され、通時的・共時的観点から新たな視点が提供されたと言える。極めて一般的なテーマであるにもかかわらず、必ずしも解決されていない問題が少なからず存在することが示され、語順に関する研究が今後も統語論において大きな位置を占めるであろうことが再認識された。